

連載 10

グローバルゼーション時代が求めるもう一つの能力

PISA は生きる力のテスト、あるいは現在の社会を生きるに必要な能力（リテラシー）を求めるテストです。日々、新聞で見る経済問題や円高、円安に一喜一憂するのは、世界中の多くの国、特に日本のように高度に発展した経済力のある国ほど、その国だけの生産力と消費力だけでは成り立たないだけでなく、他国との関係抜きには一般庶民の生活すらできにくい、グローバルゼーション社会が到来したからです。このグローバルゼーション社会の中で生き残るための能力を試すのが PISA のテストなのです。

グローバルゼーション時代を生き抜くのに、日本が劣っている部分象徴するエピソードがあります。新聞のコラムで読んだ記憶があるのですが、将来の地球規模的な問題は水資源であり、世界的な人口増加を養えるだけの水資源は地球上から枯渇し、石油から水戦争へと言われています。このような近未来の危機状況に対応するために、フランスは巨大な水メジャーを世界的規模で展開しているそうです。海水を淡水に変えて、しかも各家庭に配管する水道すらコンピュータ管理で、水資源は営利会社が独占する事業がすでに始まっているのです。海水を淡水に浄化する技術（高精密なフィルター）の 70% は日本製という驚くべき事実です。将来の経済的な視点から、日本も世界的な水資源開発に乗り出し始めたこと新聞は報じていました。水資源の高度な技術を持つ会社が集まって、政府指導（水道は厚労省、河川等は国土交通省という縦割り行政）の元で、国家として水資源に乗り出す大きなビジネス企画が発足したそうです。ところが、いざ中東や中国、インドなど、水を求めている国々に、日本の技術のすばらしさを宣伝し、ビジネスの働きかけをしても効果はいまいちださそうです。その最大の理由は、技術は世界レベルであっても、「日本の水技術導入によって、その国々がどのような利益を得、安定社会として存続していけるのか」といった説明や企画力、アイデアはフランスの企業に劣るから」だそうです。水資源を最も必要としている国家に、その国に望ましい企画、その国が欲しがっているアイデアを提供する能力、英語能力だけの話ではなくて、プレゼンテーション（説明力）力の問題だと言うのです。

受身で知識を手に入れる、みなと同じことを同じように繰り返し身につける、受験に適した特化された知識だけを詰め込むことに、幼児期から何十年間も費やしている勉強方法では、通用しなくなったということです。後日談、日本も国を挙げて水資源に乗り出すという話を聞いたフランスの会社は「日本はすぐれた技術力があるから、今後とも部品を提供する納品業者であって欲しい、世界の企画はフランスに任せてくれ」といったそうです。悲しい話です。明治以来、1世紀に渡って質の高い教育を平等に与えてきた学習方法が、グローバルゼーション時代の元でほころび始めています。